よくあるリリカルな世界の話～二羽の鴉～

イザナギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
よくあるリリカルな世界の話～二羽の鴉～

【Ｎコード】
Ｎ３２２０Ｚ

【作者名】
イザナギ

【あらすじ】
白い鴉は嫌われ者、群れから追い出されてぶーらぶら。あてもなく飛んでく根無し草。白い鴉は嫌われ者、友達なんてできやしない。でも、ずっとふらふらしていたら、ある時ある世界でとある人々に出会ってしまった。その人々は鴉を『噂もなにも関係ない』って受け入れた。鴉の心には一つの思い。『恩返しを』
鴉は今日も飛んでいく。助けてくれた『彼ら』のために。命を救った『彼女ら』のために。自分のできる限りの恩返しを。

動物が主人公というわけじゃないです、もちろん人間が主役です。
『面白い』と思っていただければ幸い。

Prologue

白い鴉は嫌われ者だ

全身、真っ白

唯一、血のような真紅の瞳

本当は『綺麗だ』って評価されてもおかしくないはずなのに

誰かがふと言ったんだ

「――――――――――――――――――死神みたいだな」

ひどい言い様だ

でも鴉は反論したかったけど、できなかった

だってその鴉の周りで、たくさんの人が死んじゃったんだから

出向く先々で、誰かが死ぬ

鴉に係わった誰かが

ただ仲良くしていただけの誰かが

――――――全く関係の無い、すぐ近くを通りかかった誰かでさえ

たくさんの人が死んだときだって、鴉はそのど真ん中でピンピンしていた

だから周りのみんなが怖がった

鴉がいる場所で、誰かが死んでたから

いつか鴉が目の前に来たら、自分が死ぬんじゃないかって、怯えた

『白い鴉は厄災を運んでくる　鴉が姿を現したら、厄災が、よくないことが起こる

――――――――――――それじゃあ『現れなくしちゃえ』ば良いんだ』

誰かが言ったんだ

そして鴉は追い出された

みんなの暮らす輪の中から

あまつさえ――――――――――――――――かつての仲間は命を奪いに来た

『二度と姿を現せない』ように

けっきょく鴉は殺された

後に残ったのは、やっと飛び方を覚えた雛(ひな)

白くて小さい羽を何とか羽ばたかせ、子鴉は飛ぶ

胸に大きな悲しみと怒りを秘めて、ふらふらと

白い鴉は嫌われ者　だったら鴉もみんなを嫌う

みんなが鴉を嘲笑えば、ひそかに鴉もみんなを嘲笑う

みんなが鴉を怨むなら、鴉もみんなを怨む

――――――――――――そして

誰かが鴉を助けてくれたら、鴉も誰かを助けよう

誰かが鴉に手を差し伸べてくれたら、鴉も誰かに手を差し伸べよう

幼い鴉が飛ぶのは、大きく広がる――――――荒れた空

結局、鴉はあまのじゃく

心の優しい、ただの鴉

『出会い』は『奇跡』

『奇跡』は『希望』

『希望』は『光』

夜はいずれ明ける

――――――――――――――――――――鴉は『光』を見つけた

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ（後書き）

……なにこれ、詩じゃん。しかも厨二全開の

一回挑戦してみたけどダメだったリリなのに再挑戦。
……まぁ原作見ながら、なんで亀更新は決定事項でしょう。
もう一本の連載もありますが、ここから先、多忙になるのであんまり更新できないかも……やるだけやってみますが。

原作に寄せすぎたからなー……前回の反省が生かせればいいけど……

ではっ

It's A Wonder Encounter

白い鴉を見たことはあるだろうか。

羽や胴体、爪の先に至るまで鴉の特徴である黒が存在せず、雪のように真っ白な鴉だ。

これは先天性色素欠乏症、通称『アルビノ』と呼ばれる個体なのだが、自然界で見かけることは稀らしい。

なんでも、その体の白さから外敵に発見されやすく、優先的に狙われるからだとか。

その希少価値ゆえに古代における神話や伝説では『幸運の証』とも認識され、アルビノの個体は神々の使いとして崇(あが)められたという。

だが白い鴉、いや『アルビノ』と呼ばれる個体は、もう一つの意味でも神々の使者として捉えられ、畏れられてもいる。

曰く――――――――――――――――――――――――『不吉の前兆』と。

これはその『白い鴉』の話。

不吉の前兆と言われて憎まれて殺されかけて、それでも生きてきた、とある兄弟の鴉の話だ。

とある世界のとある国――――――――といっても日本だが、そのとある県にある、とある都市。

名を『海鳴市』という。

中心部は高層ビルが建つような都市化が進んでいるものの、少し中心部から離れてみれば木々が広がり、また美しい海にも面した自然豊かな都市。
一言で表現するなら『都会と田舎が同居した都市』といったところだろうか。

そんな街に、とある少女は住んでいた。

姓は『高町』、名は『なのは』。

いくつになってもバカップル丸出しの美男美女な両親と、大学生のイケメンな兄、高校生の美人な姉を持つ、これまた美人になりそうな高町家の末っ子である。
家族の仲は、心配するのがバカらしいほど問題ない。両親を見ていると、近々なのはに年下の兄弟が出来ても不思議じゃないくらいだ。

通う学校は私立聖祥大学付属小学校。今年で三年生となったらし

い。

そんな彼女には、親友が二人。

一人は月村すずか。高町なのはの第一の親友で、将来の夢は『工業系の専門職に就くこと』。具体的に決まり過ぎてる気がする……。

もう一人はアリサ・バニングス。月村すずかにちょっかいを出したせいでなのはと喧嘩になり、のちに和解して親友になったという過去を持つ。ちなみに取っ組み合いだったらしい。

あれか、『雨降って地固まる』ってやつか（違

そんな仲良し三人組は現在、

「ど、どどどど、どどどうしよう！？」

「おおお落ち着きなさい、なのはっ！　まままままずは病院に！」

「アリサちゃんも落ち着いて！　動物だから獣医さんに診せないと！！」

「じゅ、獣医さんってどこにあるんだっけ！？」

「獣医さんは人間だよ、なのはちゃんっ！」

非常事態の真っただ中だった。

こんなことが起きたのは、アリサが見つけたという塾への抜け道を進んでいた時だ。

彼女たちは三人とも今年から同じ塾に通うことになったらしく、学校が終わったあと塾へ行く最中にアリサがこの抜け道を紹介、近道だからと進んでみることになった。

抜け道を通るのは二人とも初めてだったらしく、おそらくそれまではアリサ一人が塾に通っていたのだろう。

まぁそんな考察どうでもいいとして。

抜け道を進む最中に、なのはの頭に声が響いた。

《たすけて》、と。

その声のする場所へ駆けつけたなのはが見つけたのは、衰弱しきった小動物。イタチのようにも見える。

そして親友二人が合流して、先ほどの事態が巻き起こったわけだ。

その後の事態はえらくスムーズに運んだ。

すぐ近くにあったという動物病院に駆け込むとその小動物――――フェレットのようなイタチもどきは一命を取り留めた様子で、一日二日ほど安静にするために動物病院で保護することに。

……しかし、ペットならまだしも野生や野良の動物には保険は無い。動物の治療費というものは安いものでもない。

とても小学三年生の子供の小遣いで払えるものではないとは思うが、そこは親御さんに請求が回るのだろう。

ともかくも、塾の時間があるとのことで三人とも急いで（しっかりお礼は言って）動物病院を辞し、塾へ向かった。

真面目に勉学――――――――すると思いきや先ほどのフェレットもどきについて、筆談で会議をしていた。

曰く――――――

『うちは犬がいっぱいいるから厳しいかも』ｂｙアリサ

『うちも猫がいっぱいいるから同上』ｂｙすずか

すでに別のペットを飼っている二人の家は難しいらしい。
それは実家が『翠屋』という喫茶店を経営しているなのはも同じ状況とのこと。

つまりあのフェレットもどき、このままでは野良の動物ということで保健所行き、飼い手が見つからなければ殺処分という天国への階段を順調に昇って行く羽目になるのだが――――――――――――

「ではこの問題を……高町さん」
「は、はいっ！！」

その前に授業にちゃんと集中しような。
まぁ即答したんだから問題なかったけど。しかも正解だし。

結局、他二人よりも条件の緩いなのはの家で飼うことができないか相談してみることに。
てか授業終われば僅かな時間と言えども話す時間あった気がするんだけど……まあいいか。

「それでね、そのフェレットさんを家で預かれないかなーって」

夕食時で家族全員が食堂に集まっているときに、なのははその話を切り出した。

「ふーむ……」

腕組みして悩んでいるのは、白いシャツの似合う一家の大黒柱、『高町　士郎』。喫茶翠屋のマスターだ。

剣術の流派の一つである御神流と呼ばれる流派の後継者であったらしく、人のよさそうな顔をしているが、その下にはいまだ武道家としての威厳が見え隠れしている。

腕を組んでしばらく黙っていた士郎が、口を開いた。

「ところで――――――――――――――――――――――――――――『ふぇれっと』って、なんだ？」

ガクッ

キッチンに立っていた母、桃子を除いた三兄弟が全員脱力する。

交渉は、それほど難航しなかった。
なのはが世話をする、という条件付きで、あっさりと許可が下りたのだ。

この家族は、末っ子のなのはに対してだいぶ甘い。

なぜなら家族には、なのはへの負い目があったから。

一番家族が一緒にいるべきだった、わがまま盛りの時期に家族は『ある事情』でなのはの相手が出来なかったのだ。

『ある事情』以降からなのはは『他人に迷惑をかけない良い子』であろうとし、自分の欲求を抑え込んで『わがまま』を言わなくなった。

そんな、小さい子供らしからぬ行動を見て胸を痛めたのは、誰あろう家族だ。

小さいのに何かをこらえてただみんなの『いい子』であるようにニコニコと笑っている姿が痛々しくて、何かをしてやりたくて。

そんなときにふとやってきた、なのはの初めてともいえる『わがまま』。

手放しで受け入れることが出来るようなものではなかったが、それでもやっとなのはが自分の意思で頼んできたわがままを、家族は受け入れることにした。

この程度では償いになったとは思えなかったが、それでも色々なものを抱え込んでしまった少女の重荷を取り除く。

末っ子の花のような笑顔を見た家族は、改めて決意したのだった。

しかし、そうは問屋が卸すはずもなく。

「――――――――――――――――――――っ！！」

少女の耳に、再びあの声が響いた。

これから、少女に襲いかかる幾多の困難。

その一つ目が、少女に振りかかろうとしていた。

白い鴉は、飛んできた。

やっとできた友達が危ないと聞いて、飛んできた。

自分には役に立てるほどの力が無いと分かっていても、飛んできた。

二度と死神なんて呼ばれたくないから。『死神』のジンクスを取っ払いたかったから。

そしてなにより

「――――――――――――――ユーノ……」

友達を失いたくなかったから。

一羽の鴉が飛んでいく。

かつて親を殺された、幼き鴉が飛んでいく。

ただ友を思って、飛んでいく。

It's A Wonder Encounter（後書き）

一日経って第一話出すとかこいつはふざけてんのか、と……
新作出してプロローグ出して一話目出さずに終わりやがりましたよ、こいつ
もうバカかと、死ぬかと……

原作の第一話がこれで終了です。みじけーな。待たせたわりにこんなもんとか……もうくたばればいいよ……
深夜だからテンションが暗い方に絶好調です……

結構いろんな部分はしょり過ぎたな……すっきりしすぎ、かな？

とりあえず一話につき一部構成でいけたらいいな……
タイトルは原題を英訳してます。どーだ、厨二だろー

短くてすんません……次からは前書いたやつ（見られません）を修正、添削して一部にまとめられたらいいなぁ……
でも第二話って結構濃いですからねー……下手したら2部いっちゃうかも……

さて、後書きが分文より長くならないうちに、お暇（いとま）します。

週間にする予定（ぇ

それではっ！

The Magic Incantation Is "Lyrics

そりゃ一話の終わりあたりから二話全部ですから、長くなりますわ

なorz

夜の闇に染まった街の中を、小さな影が走っていた。

「はぁっ……はぁっ……はぁっ……」

小さな何かを抱えて、『誰か』から逃げるように。

「な、なにこれ！　どうなってるのぉ！？」

逃げながら大変混乱している様子の逃亡者は、高町なのは。

就寝準備を整えていざ明日に備えよう、としたときに聞こえた耳鳴り――――――――と助けを求める声にひかれるように家を飛び出し、声のする方へと駆けつけたのだ。

到着した先はあの『フェレットもどき』を預けた動物病院。

何かあると敷地内に入ってみれば、不気味な鳴き声とともに小さな影と大きな影が追いかけっこをしていた。

どこからどう見ても地球上には存在しないような姿をしている怪物がフェレットもどきに襲いかかっている。

夢のような光景だが、なのはが怪物の攻撃から逃げたフェレットを受け止めた感触は現実のものだった。

さらに

「来て、くれた……の？」

「しゃべったッ！？」

しゃべった。このちっこいフェレットもどきが、人の言葉を話したのだ。

そして這う這うの体であの動物病院の敷地から逃げ出し、今に至る。

フェレットもどきが何やら言っているようだが、長ったらしくて今の状況では全く耳に入らない。

いまだ混乱が収まらないなのはに聞こえたのは

「『資質』……？」

この二文字のみ。

それを聞いてかどうかは知らないが、フェレットもどきはぽつぽつと簡単に身の上話を始めた。

曰く、『この世界とは別の世界から来た』と。

曰く、『『探し物』のためにここに来た』と。

曰く、『しかし力不足ゆえに、このような事態を巻き起こしてしまった』と。

今の状況ではこのフェレットもどきには何かをできる術はないらしい。

だから、このフェレットもどきの『声』に反応した『資質ある者』なのはの助けを借りたいとのことだった。

「お礼はします！　必ずします！」

――――――――――――――――――――だから、『魔法の力』で助けてほしい！

少女の腕から降りて頼み込むように叫ぶフェレットもどきだが、正直なところ夢物語にしか聞こえない。

しかし夢物語に聞こえようと、これは夢でも何でもない、『現実』の話なのだ。

唸り声。

頭上から。

話に夢中で、怪物の接近に気付かなかったらしい。

飛び跳ねてからの落下攻撃を仕掛けてきた。

あまりの事態に、少女は対応できない。

思わず目をつぶった少女の体に、誰かが抱き上げる感触。

とっさの感触に目を開けると、紅い目が少女を見ていた。

鴉はやっと見つけた。

『彼』の声が届いたのだ。

でもだいぶ遠かったから、急いで飛んで行った。

しばらくすると見つけたんだけど、『彼』は小さな女の子に抱きかかえられてて、その女の子が怪物から必死に逃げてた。

女の子の足が止まった。疲れたのか、と思った時には怪物が間近にいて、女の子たちが襲われそうだった。

鴉は、空を『蹴った』。

「大丈夫か？」

なのはたちを抱き上げて電柱の陰に押し込めたのは、なのはと同年代くらいの少年だった。

真っ黒なフード付きのマントを羽織った紅い目の少年が、なのは達にケガは無いかと尋ねる。

「あっ、えとっ、だいじょうぶ……」

「……ならいい」

というと、少年はくるりと振り返って怪物に向き合った。

その手には、エアガンのような小さい拳銃。

それを見たフェレットもどきが、声を上げる。
「なっ！？　君の魔力じゃ『封印』は無理だよ！！」
「……そんなこと、言われなくても知ってる。その子が出来るかもしれないんだろ？」
少年が振り向いた目線の先には、会話に置いて行かれかけていた、なのは。
「……ふ、ふえぇぇっ！！？」
「そ、そうだけど！　でもっ！！」
「ただの時間稼ぎだ、無茶はしない」
「……わかった」
「ふえっ！？　あ、あぶないよっ！！」
なのはの心配に
「……こういうのは、慣れっこだ」
言うが早いか、少年は拳銃を怪物に向けて
「……セット・アップ」
引き鉄（トリガー）を引いた。

その拳銃は、あっという間に変化を見せる。
拳銃自体が薄い青に発光したかと思えばすぐに光は収まり、拳銃はまったく原型の無い形へと変化していた。
例えるなら、この世界で言う銃器。それも自動小銃（アサルトライフル）と呼ばれるような形だ。
少年は真っ黒なそれを構えると
「……『ラピッド・バースト』」
ためらいもなく引き鉄を引き絞った。
爆竹を鳴らしたかのような連続した破裂音が響き渡り、少年が持つ武器から薄い青の銃弾が吐き出されて怪物の体をうつ。
怪物がそれに怯んだのを見て取った少年は、コッキングレバーに相当する部分を引いた。
薬莢のようなものが吐き出されるのを確認すると、少年の弾幕が薄れてきたのを見て取って突撃してきた怪物を交わす。
「『ブラスト・グレネード』！」
少年が構えて引き金を引くと、ポン、という気の抜けた音とともに先ほどの銃弾よりも太い光弾が吐き出され、怪物にぶつかった。

途端に爆発。怪物は思わず吹き飛ぶ。

「『ラピッド・バースト』」

少年は追い打ちにかかろうとするが、その前に

「……カートリッジ、リロード……っ！！」

薬莢を排出しようとした瞬間を狙って、怪物が突撃。

少年の作業は中断され、なおも続く怪物の連続攻撃に、回避に専念せざるをえない。

「す、すごい……」

なのはが素直な感想を述べる。

同い年ぐらいの男の子が、動き回る怪物の攻撃をひらりひらりと交わし続けているのだ。へたをしたら、踊りを踊っているようにも見えなくない。

しかし隣にいたフェレットもどきは、苦い顔をしていた。

「でも……決定打を与えられてない……」

先ほどの少年の連続攻撃の後でさえこんなにピンピンしているのだ。

致命打を負わせることが出来ていないのは、明白だった。

やがて疲れはじめたのか、少年の動きが鈍くなる。

そして

「――――――――――――――づァッ！」

「あっ！！」

怪物が振り回した触手を避けきれず、もろに食らってコンクリート塀に打ちつけられた。

崩れ落ちる少年を前に

「ど、どうしよう……このままじゃ……！」

「これを！」

フェレットもどきが差し出したのは紅い宝玉。首飾りのようにこの動物の首にかけられていたものだ。

「こ、これって？」

「これで彼を助けてください！」

必死な様子のフェレットもどきから、その宝玉を受け取る。

ほんのりと内側から暖かい『力』を放つ宝玉をなのはが手にすると、

「心を澄ませて、僕の後に続いて！」

とにかく目の前で怪物に襲われそうになっている少年を救うために、なのははフェレットもどきの指示に従うことにした。

奇跡とは、偶然である

『我、指名を受けし者なり』

出会いとは、偶然である

『契約の下(もと)、その力を解き放て』

運命とは、必然である

『風は空に、星は天に』

そして必然とは、これも偶然である

『そして不屈の心は、この胸に』

世界は偶然に満ち溢れ、選ばれた偶然は必然となって運命となる

『この手に魔法を！』

出会いという名の奇跡、それが織り成した運命

『レイジング（不屈）・ハート（の心）――――――――――――――セーット！　アーーーップ！！！」

今静かに、しかし確かに

「――Ｓｔａｎｄ　Ｂｙ　Ｒｅａｄｙ.　Ｓｅｔ　ｕｐ」

物語が始まった。

空にむけて、一つの柱が立ちあがった。
桜色の、光の柱。

その根元にいるのは、小さな少女。
圧倒的ともいえる巨大な柱は、彼女を見出したフェレットもどきにも、彼女を助けた少年にも意外なものだったらしい。

「「なんて魔力だ……」」
「なんなのこれぇ！？」
「お、落ち着いてイメージして！　君の魔法の力を制御する、『魔法の杖』の姿を！　そして、君の体を守る、強い衣服の姿を！！」
「きゅ、急に言われてもぉ！」

まぁ、いきなり変な力に目覚めさせられたかと思えば、次は『魔法の杖』と『体を守る衣服』を思い浮かべろと言われたのだ。
すぐに浮かんでくるほど、人間には想像力豊かな奴はそうそういないのだが

「えーと……えーーっと……」
とりあえず考えるらしい。いい子だな。
「――――――――――――――――――――あっ！」

『魔法の杖』が、心に浮かんだ。
『防護服』の方は……ありきたりだが、馴染みのあるものをモチーフとすることにした。
「と、とりあえずこれでっ！」
――――――――――後で変更できるのか分かんないのに「とりあえず」はまずくない？
と言えるほど状況に余裕はないので仕方ないのだろう。

少女の変身が終わった。
……え、『肝心の変身シーンが無いじゃないか』って？
『アレ』を描写しろと申すか。それなんて羞恥プレイだよ。

見たかったら原作見ろ、原作を。もれなく紳士の仲間入りだぞ。
ちなみにこの『フェレットもどき』、真正面からじっくりと見ていたぞ。

まぁそれはそれで置いといて。

「ふぇ、ふえぇぇぇぇ！？　これなに！？　なんなのぉ！！？」
なのはは大変混乱していた。
言われたとおりにやってみた結果がこれなのだが、周りが少女に説明できる余裕は、今のところない様子。

そして怪物は空気を読まずに飛び上がり、なのはに攻撃を仕掛ける。

「――――ッ！　きゃっ！！」

杖を盾に、と構えたとき

［Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ］

『魔法の杖』が喋り、なのはを桜色の膜が包み、怪物を弾き飛ばした。

それは十秒もないぶつかり合いだったはずだが、その威力は想像以上のものだったらしく、怪物はバラバラに吹っ飛ばされ、電柱がへし折れるほど。

小動物が小難しい話をしているが、混乱しっぱなしのなのはには何の事だかさっぱりわかっていない。
少年が後方を警戒しているが、先ほどの怪物がまた元の姿を取り戻そうとしている最中だった。

「よ、よくわかんないけど、どうすればいいの？」
「さっきみたいに、攻撃魔法や防御魔法などの「話が長い！」うっ……」

フェレットもどきの話をさえぎったのは、あの少年。
十字路に入り、電灯でようやくフードに隠れていた顔が見えた。
目つきが少々悪い以外はそれほど特徴的なパ部分はない。まだなのはと同世代と推測できるので、成長次第では判断できないが、顔のパーツは悪くなく、全体的に見れば整った顔立ちだといえる。

「こいつは物を説明すると回りくどくなるんだ……簡単に言っていいか？」
「う、うん……」

少年から睨みつけられて少々物怖じしながらも、なのはは頷いた。
ちなみに、少年は睨み付けたわけではなくただ単に目つきが悪く誤解されやすいだけなので、あしからず。

「『封印』みたいな強力な魔法を使うには、呪文がいる」
「『呪文』……？」
「そう、呪文だ。心を済ませて集中しろ。お前の『呪文』が浮かんでくるはずだ」

言われて、なのはは目を瞑る。

怪物が復活した。
背中からうねうねと伸びる触手を、なのは達に向けて飛ばす。

――――――――――――が

［Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ］

それはなのはのバリアによってあっさりと防がれた。

あれよあれよという間になのはが『封印』を進めていく。
『レイジング・ハート』と銘打たれた魔法の杖が変形して『シーリング・モード』という姿になったかと思うと、そこから桜色の帯が飛び出し、怪物の体を締め付け、

［Ｓｔａｎｄ　ｂｙ　Ｒｅａｄｙ］
「リリカルマジカル！　『ジュエルシード』、シリアルＮｏ，２１！　――――――封印！」
［――――――――Ｓｅａｌｉｎｇ］

さらに増加した桜色の帯が怪物の体を貫き、怪物を霧散させた。

後に残ったのは、ぼこぼこに穴だらけになった道路のアスファルト、蜘蛛の巣状にひび割れが入ってしまったコンクリート塀、余波を受けてへし折れてしまった電柱。

そして――――――――――――――――――不思議な輝きを放つ青い石。

「これが、『ジュエルシード』です」

フェレットもどきがそう解説する。

「えと、この後は？」
「その『レイジング・ハート』で触れるんだ」
なのはの疑問に、少年が答える。
言われたとおり『レイジング・ハート』をかざすと、石が浮かび上がり、『レイジング・ハート』の宝玉部分に吸い寄せられたかと思うと、その中に吸い込まれた。
［Ｒｅｃｅｉｐｔ　Ｎｏ．ＸＩ］
『レイジング・ハート』の声が響いて、『ジュエルシード』を回収したことを知らせた。
それと同時に、なのはの変身も解除され、『レイジング・ハート』も最初に渡された宝玉の形態に戻る。
「あ、あれ、終わったの……？」
今まで無我夢中だったのだろうか、急に静かになった周りを見渡しながら、なのはは呟いた。
「はい、あなたのおかげで……」
フェレットもどきが言う。
「ありが……とう……」
「ちょ、ちょっとっ！　だいじょうぶっ！？」
おそらく全快ではない状態で動きすぎたのが原因なのだろう。
とっくに限界を超えて、もう満足にも動けないのだ。

「無茶をするからだ」
「君に……言われたく……」
「しゃ、しゃべらない方が良いよっ！」

一人が慌てて、もう一人がこの状況をさめながら観察していると

――――――――――――――――――――ウーーーーーウーーーーーーーーファンファンファンファンファンファン

騒ぎで誰かが通報したのだろう。
国家公務員がやってきた。

その音に硬直する二人。

「……も、もしかしたら、私……ここにいたら、たいへんアレなのでは……？」
「『アレ』ってなんだよ……でも『やばい』ってのは、分かるぞ……」

引きつり気味の顔で話すなのはに、丁寧にツッコミを返す少年。
共通してるのは、『ここに留まるのはマズイ』という直感。

「で、でも……」

「……俺たちの話がこの世界じゃ夢物語並に信憑性ないのはわかってる……だから……」
「だ、『だから』？」
少々間を開けて、はっきりと少年は告げた。

「逃げる！」
「ふえぇぇぇぇ！！！？」

いうが早いか少年はなのはの手をつかみ、一目散に駆け出した。
もちろんフェレットもどきを小脇に挟んで。

少々罪悪感がぬぐいきれない少女は、去り際に

「と、とりあえず！　ごめんなさ〜〜い！！」

と言い残すことだけにしたが、ここに駆けつけるであろう国家公務員（さんたち）に伝わったかどうかは謎である。

ヒャッホウ！！　結局一話でおさまんなかったぜぇ！！orz
しかも後半は失敗作の使い回し多いし……
もうちょい考えて物書かないと……
いらん箇所を削って削って、一話に収めましょうかね……
出来るかどうか分かんないけどっ！

この作品では、いくつかチャレンジしたいことがあって、やってみてます。

この作品におけるチャレンジ
・話の流れが分かる程度にいらない部分をそぎ落とす
・原作からの直接的な描写を減らす
・話をブッ飛ばしても流れを変えない
・オリキャラもちゃんと目立たせる

出来てないですね、ハイorz
山場とかはきっちり描写しようと思うんですけど、寒くて眠くてうまく書けないんd（殴
あああテンションがおかしい……でもこのテンションじゃないとうまく書けないんだぉ……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3220z/

よくあるリリカルな世界の話〜二羽の鴉〜

2011年12月13日05時55分発行